

平成30年度

水稲病害虫防除の チェックポイント



いもち病の病斑



ばか苗病(本田)



赤色菌核病
(疑似紋枯症)



アカヒゲホソミドリカスミカメ



イネドロオイムシ(成虫)

いもち病と防除

耕種的防除

- 本田取り置き苗を早急に処分します。
- 畦畔に上げたゴミ（稲わら等）を処分します。

早期発見のコツと薬剤防除(右図参照)

- 水田内見回り時期
ブラスタム（北海道病害虫防除所）を活用して、効率的に見回ります。
(<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>)
 - 感染好適日の約1週間後に見回り
 - 幼穂形成期5日後頃は見回り強化
 - 病斑を発見したら、直ちに茎葉散布
- 見回り場所・方法
 - いもち病が発生しやすい場所
 - ・ 昨年の発生場所
 - ・ 葉色が濃い場所
 - ・ 風通しが悪い場所
 - 株をかき分け下葉を重点的に観察します。

見歩き結果と防除の実施

見歩き調査で葉いもちを発見？

Yes

No

防除開始
出穂期まで7日間隔

出穂期の基幹防除

葉いもち多発、出穂が長引いている？

Yes

No

追加防除
7日間隔、穂揃期まで

収

穫

●いもち病の薬剤耐性菌に注意

◆MBI-D剤（商品名：デラウス・ウィン・アチーブ及びこれらを含む混合剤）の防除効果が十分に得られていない水田では本剤を使用しません。使用は防除ガイドに準拠します。

◆メトキシアクリレート（QoI）系剤使用の注意事項

- ①使用は年1回とし、使用基準を遵守。
- ②体系防除では作用性の異なる薬剤と組合せません。
- ③採種圃では使用しません。

ばか苗病

- 本田での症状：発病個体は全体に徒長・黄化します（写真①）。出穂期ころまでに枯死して、株元に無数の胞子（写真②）を付けます。
- 胞子の飛散：胞子は数百メートル飛散するとされ出穂・開花期の健全籾に付着すると、その籾は汚染種子として翌年の発生源となります。
- 罹病株の抜き取り・廃棄処理等
 - 出穂までに、枯死する前の罹病株を株ごと抜き取ります。（根の部分から刈り取ります）
 - 疑わしい徒長株・黄変株も抜き取ります。
 - 抜き取った株は、ほ場外に搬出し土に埋める等、適切に処分しましょう。



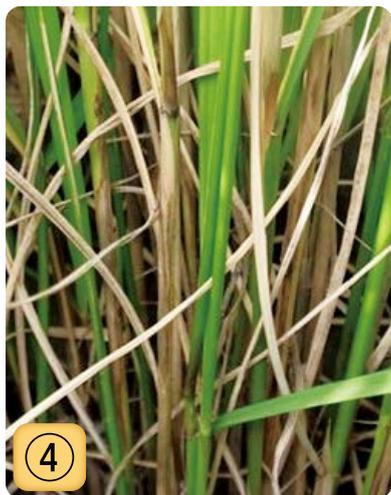
紋枯病と赤色菌核病（疑似紋枯症）

●紋枯病

紋枯病は水際部の葉鞘に暗緑色の小さい斑点が現れ、病徴が進むと周辺が褐色で中心部が灰白色の病斑となります。高温性の病害で、近年、道内でも発生が増加しています。【写真③】

●赤色菌核病（疑似紋枯症）

赤色菌核病は紋枯病に類似する病斑ですが、周縁が暗褐色で中央が褐色の紡錘形斑紋を形成し、重症株では罹病部が枯死し稈が折損します。病斑上に菌核は形成されず、収穫時期になると葉鞘内にオレンジ色の微小な菌核が形成されます。近年、道内での発生が目立ちます。【写真④⑤⑥】



紋枯病・赤色菌核病の防除

■今年の防除については、昨年収穫期にほ場で止葉葉鞘にも紋枯症状が見られた場合は、防除対策を行う。

赤色菌核病が発生するほ場では、「A 両病害に有効」を選択し、紋枯病が単発するほ場では「B 紋枯病には以下も有効」も選択肢となる。

■防除対策の選択

(AまたはB)

A 両病害に有効：育苗箱施用剤または水面施用剤（表1参照）

B 紋枯病には以下も有効

茎葉散布（無人へりまたは地上散布）

薬剤（商品名）：アミスターアクタラSCまたはモンカットフロアブル

効果の高い散布時期：出穂20日前＋出穂期の2回散布

表1 紋枯病・赤色菌核病に対する水面施用剤の効果

供試薬剤 (商品名)	施用量 (kg/10a)	防除価	
		紋枯病	赤色菌核病
リンバー粒剤	3	93~100	—
モンガリット粒剤	3	52	—
リンバー粒剤	4	—	59~93
モンガリット粒剤	4	—	54~87

※使用は防除ガイドに準拠する。

イネドロオイムシの防除と薬剤選択

- 1卵塊／株以下の密度では減収とならないので、「北の虫見番」（平成10年指導参考事項）を活用して防除の要否を判断しましょう。
- 水稻のイネドロオイムシでは、有機リン系、カーバメート系、ネオニコチノイド系およびフィプロニル系剤に対する薬剤抵抗性個体が確認されています。
- 抵抗性個体が確認された地域では、作用性の異なる薬剤によるローテーション防除を実施します。その他の地域では、前年までの防除効果を再検討した上で、薬剤を選択します。

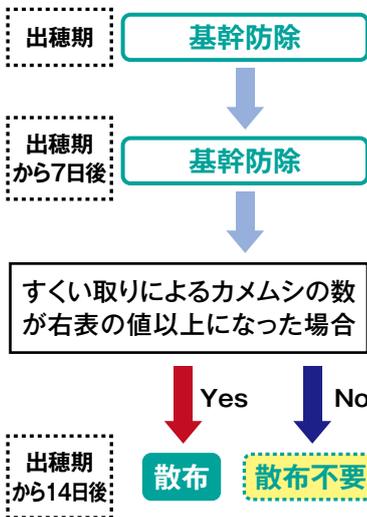


⑦

イネドロオイムシ(幼虫)の食害

モニタリングを利用したカメムシの防除

「出穂期」「出穂から7日後」は基幹防除。基幹防除以降はモニタリング調査により防除の要否を判断しましょう（下図）。



カメムシ基幹防除後の要防除水準

すくい取り時期	20回振りのカメムシ数(頭)		
	ほしのゆめ	きらら397	きたくりん
出穂 10～12日後 (追加防除の 2～3日前)	1	2	3

以降、7～10日間隔でモニタリング実施

効率的なカメムシ防除技術

- ◆ **基幹防除時期における効率的防除技術 (H27指導参考事項)**
「出穂7～10日後の1回散布」
効果が高く残効性の長いジノテフラン液剤、エチプロール水和剤Fを茎葉散布することで、基幹防除の出穂期散布を省略できます。
- ◆ **水面施用剤による防除 (H20指導参考事項)**
「出穂期～7日後における1回施用」
出穂2週間後まで残効が認められ出穂期および7日後の茎葉散布2回と同等の効果が認められます。

農薬のドリフト防止と適正使用の留意点

- ① 農薬の飛散（ドリフト）防止のため、粉剤の使用を避け、液剤や粒剤などで対応します。
- ② 風の条件での散布およびドリフト低減ノズル等の器具の使用を基本とします。
- ③ 周辺に他作物や養蜂場がある場合は、薬剤散布方法・時間帯などについての事前連絡等に配慮します。
- ④ 農薬の散布は蜜蜂の活動が盛んな時間帯を避け（午前8時～12時頃）、早朝や夕刻に実施します。